

Title	現場を知ること、現場を見ること：中西美和准教授に聞く
Sub Title	
Author	平塚, 裕子(Hiratsuka, Yūko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2020
Jtitle	新版 窮理図解 No.33 (2020. 3) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000033-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



現場を知ること、現場を見ること

研究のテーマに関わる人間たちのことをいろいろ考える。早く、間違いなく仕事を行えることだけが、生活の本質なのだろうか。パイロットや消防隊員たちは、どんな困難ややりがいを感じて仕事をしているのか。人間の抱える具体的な問題に、工学で貢献したいと願う中西さんが最も大事にしているのは、現場の人間たちの声に耳を傾けることだ。

—幼いときは、どんな子どもでしたか。

今も子どものときから、あまり変わっていません。このままでした。小学校から高校まで、授業中は「いの一番」に手を挙げて、質問をしていました。自由でしたね。両親からも、学校の先生からも「自信を持って自由にやればいい」と言われて育ちましたので、常に自分で考えて面白いと思うことをやってきました。

—人間工学に進んだきっかけは？

言葉の響きです。「人間工学」という言葉ですね。科学的なものを作ったり、いろいろなものごとを解決したりする工学という領域で、人間に関わることができるのは、非常に面白いなと思いました。

実際に大学で学んだ人間工学は、思っていたものとはいい意味で違っていました。人間は周囲のあらゆる環境から影響を受けて、心理状態が変わり、それによってパフォーマンスが変わります。

寝心地がいいベッドとか、書きやすいペンとか、そのような身体的特性だけでなく、心理的な特性や認知の特性が非常に大きく関わっていることを学びました。

—その後、千葉大学ではデザイン学科で研究をされたのですね。

デザイナーを志望する学生も多くて、彼らは一生懸命に魅力的なものを作ろうとしていましたが、それがなぜ魅力的なのか、なぜいいのかを説明したり、その意義を明らかにしたりすることには、それほど興味はなさそうでした。そんな彼らと接しながら、この「なぜ」をテーマにしたら研究のよいシーズになるのではないかと、密かに思っていました。

—それが現在の研究につながったのですね。

家電メーカーが新製品を作るとき、デザイナーが斬新なアイデアを出しても、最終形では、結局ほとんど従来と変わらないモデルに収束してしまうことが多いのです。

それは「間違いなく使えるか」を測るものさしはあっても、「魅力」や「感動」を測るものさしがないからです。けれどもこれは、今、現実にユーザが求めているもので、研究紹介(2ページ)でも「愛着」をデザインしたモノの例を紹介しました。

—ユーザの視点に立った研究といえるでしょうか。

そうですね。ヒューマンファクターズや人間工学の領域では、





時代が変われば社会的なニーズも変わるので、それに沿った解を提案することが求められます。人間の特性は普遍的でも、それを応用する先はどんどん変わるので。

応用先が変わるという点は、時代に限りません。同じ時代の同じ職種であっても、それぞれの状況は全然違います。そういう意味で私が研究で一番大事にしているのは、「現場を知ること、現場を見ることです」。

先日は消防の救助に使われるホイスに吊られてきましたし、あちこちの空港の航空管制塔にも行きました。可能な限り現場を見て、現場の人たちの価値観を理解して研究をしたいとも思っています。

——母校でもある慶應義塾大学の良さをお聞かせください。

仲間だと思います。学生のときも、そして教員として仕事をしている今も、お互いが良き先輩、良き後輩であり、一緒に切磋琢磨できる環境です。

また、私が慶應で働くことができ本当に良かったなと思う点の一つは、教員だけでなく事務職員や技術職員の方々とも様々な仕事を団結してできるということです。私はこれまで慶應を含めて3つの大学を経験しましたが、このようなチーム力

というのは、慶應が次々と新しいことにチャレンジできる大きな強みであると誇らしく思っています。

——学生の皆さんにメッセージをお願いします。

私自身が「自信をもって自由に」と言われ続けてきましたから、学生にもいつもそのように言っています。私の研究室では、学生は私のことを「中西さん」と呼びます。私は研究のリーダーではありますが、学生から学ぶことも少なくありません。自分たちでどんどん、得意な分野を開拓して行ってほしいです。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

● 研究室の雰囲気は明るくて、中西さんがいてもいなくても、毎日、みんなで一緒に昼のご飯を食べに行きます。中西さんが、意識してよい雰囲気をつくってくださっているのを感じますね。研究室でコミュニケーションができていると、研究もスムーズに進みます(修士2年生)。

(取材・構成 平塚裕子)

さらに詳しい内容は
<https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/>

自信を持って自由にやればいい。
 仲良く楽しく、一流の研究を。

中西美和

Miwa Nakanishi

専門はヒューマンファクターズ、人間工学。人間工学の視点から、実場面の問題を解決・緩和したり、新たな付加価値を創出したりする可能性を探究。2000年慶應義塾大学理工学部管理工学科卒業。2004年同大学大学院理工学研究科後期博士課程修了、博士(工学)。2005年より東京理科大学第一部工学部経営工学科助手。2008年より千葉大学大学院工学研究科デザイン科学専攻講師。2010年より慶應義塾大学理工学部管理工学科専任講師。2014年より現職。

